

オーガスチンの まなざし



主教 小林 尚明

『平和への道』

8月は、平和を考える月の同書を読んでいました。

そこでナウエンは、『1945年8月6日、初めて原子爆弾が投下された時、平和をつくり出すということは今までない意味を持つようになりました。すなわち集団自殺から人類を救うという任務をおびたのでした』と説明していました。続けて『広島への被爆、それに続く核戦争によって、キリスト者にとって平和活動は中心的な任務となりました。他に緊急な任務、すなわち礼拝、宣教、教会分裂に対する癒し、貧困と飢餓の除去、そして、人権擁護などたくさんあります。しかし、これら全てに先行する任務、すなわち平和活動は、これらと密接な関りがあります。今日、平和をつくり出すということは、すべての生物がこの地球上において、共に生き続けるこ

とを可能にすることを意味するのです』と語っていました。

神戸教区において、信徒の高齢化・少子化が問題だ、と言われ、多くの教役者と信徒で問題解決の為に知恵が出し合われます。その努力と比べて、平和をつくり出すことへの努力は、どうなのか。平和についての問題意識が必要なのではないかと感じています。

『広島平和礼拝・被爆証言』

今年の広島平和礼拝で被爆証言をしてくださった杉山武郎先生(ヒロシマを語り継ぐ教師の会・会長)は、証言の最後に『今の日本は平和ですか』と聴衆に問いかけられました。そして『今の日本は戦争はしていません。しかし、それで平和ですか。親が子どもを殺し、子どもが親を殺す。学校ではいじめがあります。それで平和と言えますか。みなさんの周りから平和をつくり出してください』と語られた言葉が心に残っています。

殺人やいじめも平和の問題なのです。平和をつくり出すために私は何ができるのでしょうか。『わたしの平和を与える(ヨハネ14:27)』と言われたイエス様からイエス様の平和をいただく。平和を実現する者に成長していきたいものです。

(神戸教区主教)

聖公会神学院にて

司祭 ペテロ 中原康貴



司祭に按手されて10年を過ぎた頃から、日本聖公会の歴史と宣教の学びを深めたいと思いい、国内留学の希望を教区主教に伝えていました。そして、今年の4月下旬より、聖公会神学院(東京)の特別研修生として、19年ぶりに神学校で生活しています。その様子を少しご紹介したいと思います。

まず、神学院では関心のある授業をいくつか聴講し、今まで手元にあってもじっくり読むことのできなかつた宣教師の手紙や、神学院にある日本聖公会の史料の精読に励んでいます。また、月々金曜日は朝・夕の礼拝と昼食を神学生や教職員と共にし、毎週金

曜日の夕方に行われる聖餐式の司式と説教を月に一度、担当しています。

主日は、いろいろな教会を訪ねています。当初は聖公会の教会ばかり訪ねていましたが、最近は他教派の教会も訪ねています。他教派の教会では慣れない事ばかりで、ずっと緊張しており、教会を出るたびに、新来会者がどれほど心細い思いで教会に来ているのかを痛感しています。

現在、神学院には5人の神学生がいますが、そのうち4人が女性で、今年45歳になる私より若い神学生は1人。「20代・男性」の神学生が多かった19年前とは大違いです。しかし、これは日本や聖公会神学院に限ったことではなく、英米聖公会の多くの神学校でもそのような傾向にあるようです。私の神学生時代は深夜まで翌日の課題に追われつつも、神学生同士でよく遊びました。しかし、今の神学院にはそういった雰囲気はありません。当初は少し寂しく思いましたが、今はそうした環境で自然と学びに集中する

ことができています。

教会で牧会している間は、常に複数の仕事が同時進行しており、それを自分で計画的に実施しなければなりません。特に神戸の教会では、派遣された教会の牧師以外の仕事の方が多い時期も少なくありませんでした。そうした中で一つのこと意識を集中させることができず、無駄に時間が過ぎることもしばしばでした。それが、今は規則正しい集団生活の中で、そのほとんどの時間を「日本聖公会の歴史と宣教」という関心に集中することができています。そして、そうした時間は19年間の牧会生活で拾い集めた神様の恵みを整理整頓しているようでもあります。今まではバラバラだった知識や経験が、次々とつながっていくのです。

このような機会を与えてくださった神戸教区と受け入れてくださった聖公会神学院、そしてすべての源である神様に心から感謝しつつ、今しかできないことを精一杯頑張りたいと思います。